

わたしはお米

多賀城市立多賀城小学校 6年 武藤真知

生まれたとき、私はお米として生まれました。いつも、暖かい太陽と、優しい農家のおばあさんに見守られていました。6月ころ、とても大きい台風が来ました。農家のおばあさんは、台風から私を守ってくれて、汗をかきながらビニールをかぶせてくれました。7月ころ、スズメが私を食べようとしてきました。それを、暑い中、かかしが一生懸命守ってくれました。そして、8月ついに出荷です。首にタオルを巻いたおじいさんがトラックに、私と私の仲間たちを入れたふくろをつめていました。

いろいろなお米と私はいろいろなお話をしました。「おれ、売れるのかなあ…」「そろそろ食べてもらえるんだな」といろいろな声がありました。私は、今まで私を育ててくれた農家のおばさん、かかし、太陽、水、豊かな緑、本当にありがとう。今から、おいしく食べられてきます！と思いました。

トラックが止まったかと思うと、私はエプロンを着たおじいさんたちに運ばれました。少し時間がたつと、楽しい音が鳴り始めました。すると、女の人、男の人、いろんな人が入って来ました。また、少し時間がたって、目の前に、スーツを着たお姉さんが、「おいしそうね」と独り言を言いながら、かごに入れて、買って行きました。

お姉さんは、新聞をよんでいる男の人がいる家に帰って来ました。男の人は私を洗って、すい飯器に入れました。ああ温かいなと思いました。

ピピピピッピピピッピと音がすると男の人はふたをあけて私を茶わんによそいました。机の上にはお味そ汁とお魚がおいてありました。そろそろ食べてくれるんだと私は思いました。「いただきます」の音がして、20分たっても私のことを食べてくれませんでした。

ついに、「ごちそうさま」の声がしても、私のことを食べてくれませんでした。今まで育ててくれた人たちになんて言えばいいのだろう…と私は思いました。

するとお姉さんがあら一つぶ残っているといい私を食べてくれました。ありがとう。本当にありがとうと私は思いながら私はとけていきました。

お米は一つぶ残さず食べよう！